

藤谷清六著「マダム輝子の淡雪亭」に寄せて

## 「過剰の蕩尽の場としての『淡雪亭』」

伊藤 洋

地球の年齢はおよそ 46 億年と推定されている。その生まれたばかりの姿を見た者はいないから想像するだけだが、恐らく荒涼としたものだったであろう。しかし、今から約 5 億 8 千万年前、カンブリア期に入ると地球は爆発的な生物の発生期を迎えた。原始的な藻類や無脊椎動物たちである。この生物爆発を促したのは、地球に安定的にエネルギーを供給していた太陽であった。

太陽の恵みに促されて、まず植物が地上を覆った。だが、その植物の成長が鈍化すると、もはや太陽エネルギーは過剰となり、使われないエネルギーは虚しく黒体放射によって宇宙の果てに散逸した。これを救済したのが、草食動物だ。動物たちに食われることで植物は再生し、そのために太陽エネルギーは大量に消費された。だがしかし、この二者の関係が平衡するようになると、再び過剰性を露呈し、地球表面の活動は沈滞した。

この沈滞を破ったのが肉食獣の出現である。彼らは、草食獣を食することによって、その欠損を穴埋めするよう草食動物世界を刺激し、それによってなお一層植物が消費され、そのことで太陽エネルギーは一段と有効に使われるようになったのである。

この流れの極めつけは、人類という世にも不思議な哺乳動物の出現である。彼らは、動物も植物も食する雑食性。加えて 1,500CC の大きな脳を持っていたので、進化という気の遠くなるような道筋を通さなくても、学習と推論によって、一世代・一個体において行動様式を変えることすらできたから、地球環境に適用する能力が極めて高く、瞬く間に地球の津々浦々を占拠するにいたった。人類の発生は、太陽エネルギーの消費 = 蕩尽にとつてまさに画期となる大事件だったのである。

それでも初めのうち人類も、動物を捕獲し、植物を補完的に食する低消費型の生活スタイルをとっていた。やがて「農業」を創造することによって、食糧確保に画期をもたらした。狩猟や漁労の生活では安定的な食糧確保はままならない。それに比して、農業は気候変動による不安定性はなお残るものの、狩猟生活と比較して桁違いに安定的な生存を約束する。

農業の発明は人類の発展を一段と促した。農業は、翌シーズンに蒔かれる種子を食糧とするから、次期収穫期までこれを保存する必要がある。それ以前に不足をきたすのは飢餓を意味するから、どうしても収穫物を過剰に保存しようとする。結果、新たに「貧富」という他の動物世界には決して存しない社会的記号をも創始したのである。

生活の不安感の軽減は別の不安を創り出す。狩猟時代には空腹の恐怖に促されて危険を

平気で行動した人間共が、定住と安定を手に入れるようになると、そこはかたない形而上学的悩みを感じるようになった。これを解決するために生み出されたのが宗教である。豊かさによって生み出された宗教は、それゆえ豊かさを再生しない暇人として「僧侶」を創作し、それに布施することを教義とすることによって、「過剰の蕩尽」の役回りを彼らに負わせたのである。

しかし、僧侶の能力ではせいぜい朱塗りの伽藍を作る程度であり、有り余る太陽エネルギーを蕩尽するには能力不足だった。そこで、開発されたのが、王族・封建領主・地主などの有閑階級だった。つまり、階級社会とは過剰性蕩尽の役割を負わせる社会的組織の総称なのである。

しかし、ここまでしても、なお太陽エネルギーの過剰性を防ぐことはできなかった。そこで究極の大発明が人肉嗜食としての「戦争」である。戦争は人肉を消費することで、多数の赤ん坊を産み出す余地を新たに確保する。兵器の技術開発は止まるところを知らず、より効率的に人類を殺傷する手法が日夜莫大なエネルギーとコストと叡智？を投入して開発されている。

藤谷清六作「マダム輝子の淡雪亭」は、まさに過剰の蕩尽に関する三幕一場である。ここでの主題は「祝祭性」による蕩尽、つまりドンチャン騒ぎによって過剰性を緩和していくという、原始農業社会の田楽など同根の伝統的な「マツリ」による富の消尽である。その意味からすれば新規性には乏しいが、四郎が報告してくれた極楽情報が、過剰の穏健な蕩尽に失敗している人類にとっては、極楽という明るい未来が未だ残っていたのだという救いを与えてくれる。戦争のような暴力によらずに過剰を蕩尽すること、それをこそ「文化」という。完成した「淡雪亭」の座舗で輝子のいう華麗な古典「文化」が花開くことを期待する。